

げに大聖の御教の  
いとも貴き一路のみ。

## 四季

松村芳仙

春

青空から落ちる春の光は  
目も眩むばかりに明い  
春の軟かな光は  
細道の左右を若草で色どつて居る  
地にも微笑の心持が溢れてゐる。

夏

夏の日の激しき光  
四邊はかつとしてゐる  
草の葉はむさされて  
風は輝いて

廣い天地は沈黙と吐息とを産んで居る。

秋

晴れた秋の日和の濃い蒼空  
白い雲が雲母のやうに輝いてゐる。  
九月の日は明るかつた  
夏よりも明い  
物の色に滲入る光ではなく  
物の表を軽く動かす光である。

冬

弱い冬の陽は  
時々雲間を洩れて來る  
空氣は冷たいけれど  
黄色い光線が  
ほんのりと窓の障子に映る。(終)

## 人間劇場

佐藤翠嵐

人生は一つのシアターである——  
無表情な人間社會の舞台上に  
踊る踊子、それが人間の姿なのだ

見よ、悲しくて涙を流す人  
嬉しくて笑を湛へる人  
怒る人、嫉む人、愛し合ふ人  
そして血みどろに働き汗する人々  
是等全ては笑はれぬ喜劇だ。

緑色の垂れ幕が

静かに上げられて行く――

人間劇場に涙の喜劇が演じられるのだ  
見よ、目まぐるしく踊る其姿を  
泣き、笑ひ、怒り、悲しみ、諦らめる  
そして終に何物をも掴み得ず  
演じ果てた踊子は  
闇黒の奈落へと亡びて行く。

古きより新しきへ

弱きより強きへ

新陳代謝を繰り返す

我等の戯曲は

何處迄操り展るげられて行くのたらう  
苦と慾の世界よ  
久遠の古より永劫の未來まで  
不可解な謎を以て進む  
我等の人間劇場。

短歌

## 身延の一とせ

小島 一 誠

- 一、 門松の洒々とゆかしき町のさま、  
さすが八島の人のよる山
- 二、 白雪の御山をおほふ巖そさや、  
祈らぬ人も涙ならまし
- 三、 見覺の芹つまむとて來にけれど  
香のみ漂ふ春の若日に
- 四、 法服に學帽かむる珍姿  
うれしげに行く新學期かな